

令和 2 年 6 月 6 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K01973

研究課題名(和文)「分割統治」に抗する貧困層の新しい戦略：フィリピンの事例

研究課題名(英文) Strategies of the Weak against Divide et Impera in the Philippines

研究代表者

中西 徹 (NAKANISHI, TORU)

東京大学・大学院総合文化研究科・教授

研究者番号：30227839

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：発展途上国の政治経済は、「冷戦」を挟んで、大きな変動を遂げてきた。たしかに、21世紀以降、「グローバル化」が深化するなかで、「貧困緩和」に大きな前進がみられた。しかし、他方において、国内においても、国際間においても、所得や資産の分配の悪化が顕著となり、「格差拡大」が生じている。それは、超富裕層(強者)による他の階層(弱者)間の対立を利用した分割統治をとおして、持続していく可能性も指摘されている。本研究は、食と健康に着目し、この条件下における弱者の対抗戦略としての有機農業の可能性について検討した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、(1)分割統治という超富裕層の表面には現れにくい戦略の可能性に着目し、参与観察と質的データ解析によって、弱者の新しい生存戦略を提示する、(2)開発研究において重要性は指摘されながら、分析が進んでいなかった「非経済的便益」について「社会関係」という代理指標を使うことによって、社会関係自体の緊密化が人々の「福祉」(well-being)を改善し得ることをあきらかにし、「社会関係資本論」に新しい視角を提示する、(3)新しい戦略オプションを用意することによって、貧困層のより能動的な開発への参加の誘発に寄与する、という諸点において、学術的、社会的意義があると考えられる。

研究成果の概要(英文)：The political economies in developing countries have shown fluctuations across the Cold War. Indeed, after the end of the Cold War, as "globalization" has deepened, poverty in these countries has been dramatically alleviated. The distribution in income or assets has deteriorated, however, both domestically and internationally, causing a widening disparity. Such global inequality can continue through "divide et impera" strategy designed by the super-rich stirring up conflicts among the other (the weak). By focusing on food and health, this study examines the possibility of organic farming as a counter strategy for the weak under these conditions.

研究分野：地域研究，開発研究

キーワード：フィリピン 弱者 グローバル化 分割統治

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

(1) フィリピンの社会階層をめぐる研究の進展 フィリピンでは、近年の堅調なマクロ経済の状況もあって、中間層が台頭してきたという事実発見がある。しかし、所得分配の改善や貧困削減が順調に進展してきたわけではない。むしろ中間層と貧困層の間に新しい政治的対立軸が見出されている。この状況は、富裕層が利用可能な「分割統治」に有利な条件となっている。

(2) 大陸東南アジア山岳地域の少数民族に関する政治学的研究 分割統治という「強者の戦略」に抗する「弱者の戦略」を考える際、有用な参照枠組みを提示しているように思われるのが、中国南部と大陸東南アジア北部の国境周辺に囲まれた地域(Zomia)における最近の研究である。その地域は、人口1億の多数の少数民族からなり、中国や周辺国の支配を回避し自治を重んじる高地民社会であったという。高地民は、低地国家からの支配を避け、外部からの接近が困難な自然条件を求め、平等主義、高い民族的流動性や多言語を容認する社会集団を創造するに至ったという議論である。この研究は、貧困層の画一的な保護と管理に傾きがちな開発政策論に大きな影響を与えつつある。そこで、本研究では、この研究の視角を発展させ、新たに親族関係や疑似親族関係などの「社会関係」に着目し、フィリピン社会への適用について、考察を深めたい。

(3) 社会関係資本論 本研究は、社会関係資本の概念の批判的再検討によって社会関係についての議論を発展させ得る。従来の社会関係資本論は、社会関係の「資本」としての役割に注目し、コミュニティが共同利害の実現に果たす役割をあきらかにするという成果を挙げてきた。しかし、広くアジアにおける貧困研究は、定住誘因となる社会関係の緊密化が共同利害を再生産するという逆の因果関係をも示唆している。本研究は、この観察を重視し、社会関係を「福祉指標」の一要素と見なすことによって、社会関係資本を強調する議論を補完し、「社会関係」をめぐる議論の発展に寄与しようとするものである。

### 2. 研究の目的

フィリピンでは、1990年代から新しく中間層となる者が増加してきたが、これに対応する顕著な貧困の改善は達成されていない。むしろ中間層と貧困層の間に社会的乖離と軋轢が生じているという観察が新しい。本研究は、富裕層による「分割統治戦略」に対抗し得る、貧困層にとっての新しい対抗戦略を導くことを目的とする。

### 3. 研究の方法

互いに異なる生態系、文化を有する複数の小社会集団について、次の主題についての現地語による調査を実施する。すなわち、対象小社会集団とその単位の特化、社会ネットワーク・データの収集、個人属性(経済指標、社会的威信など)の析出、「重要な事件」の発見と集団に固有な時間軸の策定、外的諸条件(マクロの経済指標、地域開発政策など)の変容の把握である。そして、これらの調査によって得られたデータに基づき、与件の変化と社会ネットワークの変化がどのような相互依存関係を有しているのか、また、貧困層が外部との間にどのような関係を志向して生計戦略を立てているかをあきらかにし、発展途上国における「貧困」理解のための新しい枠組みの構築を目指す。

本研究の調査研究実施国フィリピンは島嶼国であり、文化的にも、生態学的にも多様を極め、そこに貧困問題を理解する難しさがある。そこで、これまでの地域研究において、しばしば比較対象とされてきた(1)「低地フィリピン人社会」と(2)「少数民族社会」を取り上げ、次のように、研究代表者中西が調査経験を有する2地域において、実態調査を実施する。すなわち、(1)については、マニラ首都圏マラボンのスラム地区の不法占拠者層を、(2)については、西ビサヤ地方と中部ルソン地方の農村集落を、それぞれ調査地として選定した。

### 4. 研究成果

(1) 強者の戦略 クレマーは、「人間には誰もが天才的な発見を行う可能性を有しているので、確率的に考えれば、人口の増大はより多くの発明や技術革新を生むことになる」と論じた(Kremer:1993)。しかし、革新をもたらした人々の属性の分布は必ずしも一様ではなく、高い教育を受け、高度な専門知識を有する階層に有利な条件が満たされており、それは世代間で引き継がれる。その分布が、「強者」に偏るとき、革新的発明を実現する確率の低い「弱者」に対する応分の社会的配慮はなくなるであろう。また、技術革新は、しばしば規模に関する収穫逓増をもたらすものの、独占を生むのではないという考えもある。技術はすぐに陳腐化し、差別化された新商品による「独占的競争」の下では、独占利潤は消失するためである。しかし、独占を享受できるはずの富裕層である「強者」が黙ってこの状況を見過ぐすとは考えにくい。彼らは巧妙に政府規制を誘導し、独占的地位を維持しようとするはずである。その際、「ニュー・エコノミー」(new economy)の存在を無視することはできない。その特異な論理の一つが「スターシステム」である。情報通信技術の発展とグローバル化が進み、「一つの世界」が実現しつつある現代経済では、当初の生産費用は高くとも、いったん影響力を有する市場で高い評価を得れば、その財貨・サービスは瞬く間に世界中の膨大な市場を席卷することになる。市場における「信頼」の獲得は、生産者に対して、売手独占者としての巨額の利益の実現を保証する。市場が単一化に向けて進むにつれ、情報過多となった膨大な消費者が、情報処理能力の不足から他者に意思決定を委ねてしまうからである。消費者は他の消費者の行動を模倣することによって、あるいは売手独占者による広告戦略によって、本来、自由であるはずの意思決定の余地を図らずも狭められることになる。

したがって、高度な技術開発によって新しい財貨・サービスが発明され、AIやロボットの進化によって経済が益々高度化すれば、その後は市場における「評判」とそれを獲得するための戦略のみが重要になり、もはやかつて重視されていたはずの人々の労働の価値や意義はほとんどなくなってしまふ。このようにして、「労働」は蔑視される新しい価値規範が生まれる。

(2) 新しい貧困の出現 その中で生じているのが「新しい貧困」である。最近の開発経済学では、発展途上国の貧困問題は、「飢餓に象徴される貧困」から「肥満と生活習慣病に象徴される貧困」に移りつつあるという認識が共有されつつある。フィリピンにおいても、保健省によれば、1990年代以降の経済発展がもたらした生活水準の上昇と医療技術の進歩によって、死因は劇的な変化を遂げ、かつての最大の死因として挙げられていた肺炎、結核、消化器系疾患が減少する一方で、循環器系疾患、糖尿病、癌といった生活習慣病が死因として増加している。それは、フィリピンにおいて平均余命が伸び悩む原因となっているように思われる。世界銀行によれば、フィリピンの出生時平均余命は、1960年の57.9歳(189カ国中85位)から2017年の69.2歳(199カ国中144位)に相対的順位が下がり、いまや中所得国平均をも下回っている。以上の予測は、今回の研究によって、研究代表者が35年来、調査を実施してきたマニラの低所得層地区のみならず、地方都市(ヌエバ・エシー八州ギンバ、西ネグロス州バコロド、アクラン州カリボ)における保健所などのインタビューにおいても確認することができた。すなわち、1990年代以降、社会経済変動の中で、「第一の貧困」とも呼ぶべき絶対的貧困が緩和してきた。ところが、2010年頃から、徐々に、青壮年期の人々が深刻な生活習慣病に罹患する事例が目立つようになったのである。脆弱な医療制度と所得制約のゆえ、長期の闘病と早世が本人と家族に与える負担は、先進国の場合とは比較できないほど、深刻かつ多大な長期的ものになる。それは、貧困層を中心とした「弱者」間の格差を拡大せしめ、彼らの政治的あるいは社会的交渉能力を弱体化する。

(3) 弱者の対抗戦略としての有機農業 この点で、有機農業は、独占者が「一人勝ち」するようなシステムにはなり得ない。生産から流通まで、全ての面において貫徹する多様性の優越こそが、有機農業に不可欠な特性だからである。有機農産物は、匿名性の高い統合された市場で取引されるようになった途端、商品の質、信頼度が落ちるか、それを維持するための高い費用がかかる。したがって、その市場空間は、主として分断された狭隘なコミュニティであり、その取引は、極めて緊密な社会関係を有する主体間の相対(face to face)取引になりやすい。本来、この種の市場は、情報の共有が困難であるために、「非効率的」(inefficient)という汚名が着せられてきた。しかし、この一見、客観的にみえる評価は、「一人勝ち」を維持したい「強者」にとって、情報が遮断されているためにコントロールできないという苛立ちの表象だと考えても矛盾するところはない。そこに、有機農業における「弱者」の交渉力の強さが存在するように思われる。そして、こうした信頼に裏打ちされたコミュニティ的空間は「弱者」間における軋轢を避ける役割をも果たす。

(4) いくつかの事例 以下では、顕著な達成度を示していた2つの事例について要約する。

中部ルソン地方 ニエバ・エシー八州ギンバ町のC村は、極めて高い生産性を有する米作農村でありながら、収量自体が落ちる有機農業を導入して17年を経過している。導入世帯は400世帯中17世帯にすぎない(2019年9月現在)が、多くの農家は、コメのみならず、タマネギなどの野菜に加え、ティラピア養殖、畜産などを行い、多品種少量の複合経営を実践しており、最近では、現金収入として利益率の高い野菜についても部分的に有機農法が導入されつつある。有機農業の拡大を阻んでいる要因の一つは、費用の高い認証にあった。この点で、村が広く薄い親族・儀礼親族ネットワークによって結ばれ、信頼とコミュニティが再生する条件が整備されている点は注目すべきであろう。C村への有機農業の導入は、村内の農業組合長の姻族・親族の五人がSAC-GPの研修に参加したことがきっかけで親族や儀礼親族に伝播した。それは農業における協働作業を容易にするのみならず、村全体の化学投入財の減少にも貢献している。有機農業に不可欠な種子交換、恒常的な情報交換、労働力交換を促進し、農民間の接触機会がさらに増加するという相乗効果を生むからである。そのため、2018年より本格的に村で拡がりつつある参加型有機認証制度は農家間の地域間連繫に大きな役割を果たすと考えられる。

西ビサヤ地方 東・西ネグロス州の取り組みは、ネグロス島全域に影響を及ぼしている。まず、2007年、東・西ネグロス州は共同で遺伝子組換え作物の栽培を禁止し、翌年には、島全体を「有機の島」というスローガンが共有されるようになる。このような経緯から、西ネグロス州バコロド市の入口には、GM種の禁止をうたう掲示板が設置されて、その裏手では、簡易有機農産物市場が開設され、山岳地帯先住民族による直販が行われている。また、隣接する大きな仮設テントの中に、調理済みの総菜を選んで注文するデリ形式の食堂があり、貧困層・中間層向けに昼食と夕食を提供している。さらに隣には他方、バコロド市中心街のモール内には、富裕層向けの有機農産物を使ったレストランを開設した。二つの異なる形態の飲食店の食材やメニューはほぼ同一であるが、市場差別化がはかられている。こうした活動は、農民、地方政府、フィリピン大学の共同作業の結果であり、他地域のモデルとなり得る事例である。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 NAKANISHI, Toru	4. 巻 54-2
2. 論文標題 "Book Review: William Easterly, The Tyranny of Experts: Economists, Dictators, and the Forgotten Rights of the Poor"	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 Developing Economies	6. 最初と最後の頁 198-201
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1111/deve.12101	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 中西 徹	4. 巻 100
2. 論文標題 現代経済の「錬金術」と有機農業：フィリピンにおける「食」と「貧困」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東洋文化	6. 最初と最後の頁 125-174
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15083/00079038	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 5件/うち国際学会 4件）

1. 発表者名 NAKANISHI, Toru
2. 発表標題 Food and Health for the Weak in a New World
3. 学会等名 Community Currency Seminar, University of the Philippines, Los Banos (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 NAKANISHI, Toru
2. 発表標題 Outwitting the Strong: Organic Food for the Weak
3. 学会等名 the 4th Philippine Studies Conference in Japan (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Nakanishi, Toru
2. 発表標題 Economics of Momo: Money and Poverty
3. 学会等名 25th Sustainable Shared Growth Seminar "Community Currencies and Sustainable Shared Growth" (University of the Philippines, March 21, 2018) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Nakanishi, Toru
2. 発表標題 Obese Children Living in Poverty: Organic Food for the Poor
3. 学会等名 Social Research Seminar Ateneo de Davao University (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 中西 徹
2. 発表標題 経済学からの「逸脱」と「あるべき調査」からの「離脱」
3. 学会等名 「コミットしてゆくフィールドワーク」(秋田公立芸術大学) (招待講演)
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 大野 拓司、鈴木 伸隆、日下 渉	4. 発行年 2016年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 408
3. 書名 フィリピンを知るための64章	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----